

木曽川



木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
今回は輪中のふる里安八町を特集し、
輪中の形成過程や水防活動などを追跡。
明治改修第三編では分流工事の実態をご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《安八町》

◆発展を遂げる緑の田園工業都市

AREA REPORT

◆輪中地帯の悪水排除と水防活動

気ままにJOURNEY

◆桜の花が咲き競う歴史街道を行く

歴史ドキュメント

◆着々と進められる分流工事

TALK&TALK

◆明治改修における治水技術／河村三郎博士

民話の小箱

◆蛇池と一本松



発展を遂げる緑の田園工業都市

長良川と揖斐川にはさまれた水郷地帯、それが安八町です。豊饒なる水の恵みは地味豊かな土壌をはぐくむ一方、洪水という恐ろしい災禍をもたらししました。その道のりはまさに、水害との闘いでした。先人たちの尊い犠牲や、汗や涙の苦闘……。こうした努力は実り、緑豊かな田園工業都市に発展を遂げ、現在では、快適な町づくりを目指して、多彩な事業が展開されています。



安八町空撮



■安八町のあらまし

安八町は濃尾平野の西部に位置し、長良川と揖斐川にはさまれた南北約九km、東西約三kmにわたる細長い地域です。海拔は四〇七m内外で南に向かって緩やかに低下しており、町内には中須川や中村川など、長良・揖斐の支派川が網の目のように流れています。大小河川がもたらす水の恵みは地味豊かな土壌を育み、川の道という交通手段となるなど、一定の居住条件を満たしていましたが、その一方、洪水による水害や河道の変遷なども稀ではありませんでした。この町に人々が移り住むようになったのは



『ふるさと安八町』より

■戦火を浴びた下克上の時代

足利幕府が崩壊し日本全土が戦乱の舞台となった下剋上の時代。この地域にも戦



森部合戦場跡

す織田信長が岐阜・稲葉城の斉藤勢を攻略する際、森部も戦乱の舞台となりました。永禄四年（一五六二）五月、千五百余騎を率いた信長勢は長良川を越えて森部に侵入。湿地帯を巧みに利用した戦術が功を奏し、六千余騎の斉藤勢を撃破。森部の薬師堂には両軍兵士の霊を祀った記念碑が残されています。

石田三成率いる西軍と徳川家康率いる東軍が天下を分けた関ヶ原の合戦の折りには、徳川家康と親交を深めていた東本願寺教祖・教如上人の上洛に際し、この地の門徒土手組が活躍しています。一説によれば石田三成挙兵を知った教如上人がこれを家康に知らせるため、関東から下向。三成の伏兵を避けるために土手組に助けを求め、森部の光顕寺に身をひそめたとか。その後土手組門徒は教如を守護して上洛を果たしました。この際討死にしたものは十八名、その功績により光顕寺は直参を許されました。

■輪中の形成

木曾三川下流域一帯で最も複雑に小輪中が入組んでいるのが安八町一帯です。これは長良川や揖斐川が接近して流れ、しかもその支派川である中須川、中村川などが乱流するためでした。度重なる水害から集落を守るため人々は一体となって輪中堤を築き、江戸中期から幕末にかけて七輪中が形成されました。（輪中分布図参照）。

正保元年（一六四四）に作成された美濃国絵

■脇坂文助の業績

文助は天保十三年（一八四二）、安八町大野の大地主・脇坂文治の長男として生まれました。当時の安八町は洪水の常習地帯。災害の恐ろしさや人々の悲しみは、少年の心に深く焼きついたのでしょう。治水事業に全財産を投げ出した彼の針路は、この頃から萌芽していたのです。少年時代の文助は漢学者としての全国に名を馳せた観音寺の大夢和尚に学んでいます。そこで机を並べていたのが、後の衆議院議員であり治水活動の第一人者である山田省三郎。彼は学友に、そして治水に心血を注ぐ父親に大いなる影響を受け、その第一歩を踏み出すことになりました。二六歳から十二二年間に渡り庄屋戸長を勤めた文助は、郡中総代や堤防取締方に任命されました。この間に生れ故郷大野の掛廻堤築造に奔走し、私財を投じて工事を竣工させています。

明治十二年には最初の県会議員に当選、「治水共同社」創設が議員となつての最初の大きな仕事です。その一方、山田省三郎らとともに、時の政府に木曾川水系の根本的治水対策を請願。これらの請願活動はついに実を結び、明治二〇年、木曾三川分流水事は着工されました。しかしその最後を見届けることなく、『人に似た桑山子（のり）の里や秋の暮』の辞世の句を残し、下宿屋の一室で一人寂しく五〇歳の生涯を閉じました。この訃報を聞いた山田省三郎は『歴代の名門が一朝にして廃絶に帰した思いがする』と心を痛めました。安八町役場に建つ顕彰碑は、文助の偉業を今に伝えています。



脇坂文助の碑

ふるさとの町・探訪記

ありましたが、寛文年間（一六六一〜一七三）には南西部から東南部へかけて輪中堤を築き、輪中の形態を整えていきました。この時期、中須輪中や北今ヶ淵輪中では、部分的に築造された堤防が存在するだけで、完全な輪中ではありませんでした。この理由としては、中須、大明神、北今ヶ淵を含めた集落がやや高地にあり、河川も自由に蛇行、天井川の傾向も少なく、従って排水も容易なため。つまり、江戸中期までの安八地方は環状の輪中堤防を必要とはせず、その必然性は宝永の大取払いや宝暦治水、新田開発といった傾向の中から生まれたのです。宝暦五年（一七五五）、薩摩義士による治水工事によって油島締切堤や大樽川洗堰が完成すると、この地域の河川の水位が上昇し、一方では長良・揖斐川の河床が高くなつて天井川となり、従って完全な輪中堤防のなかつた中須・大明神・北今ヶ淵などでも築堤せざるを得なくなりました。中村輪中は宝永年間（一七〇四〜十二）に輪中堤の一部が築造されていましたが、堤外の草野を本堤内に囲いこむため、北方の旧鎌倉街道を堤に利用して掛廻堤防としています。北今ヶ淵輪中も同様、宝暦治水以降水害が激化。しかし大垣藩領、幕府領と隣接するこの集落の地理的、政治的環境は、

容易に築堤を許さず、安政年間（一八五四〜一六〇）に近隣の輪中が堤防を補強するという機運に乗じてようやく中須川沿いに新堤を築造し、完全輪中の形態を整えています。このように宝暦治水以降、安八町一帯では掛廻堤の築造に尽力するようになっていますが、その一方で輪中間の対立は激化していきましました。寛政十年（一七九八）四月の大洪水では、中村輪中の外堤、数ヶ所が決壊、その修復をめぐって森部輪中と争いになり、天保二年（一八三二）、数百両の工事を負担することによってようやく解決しています。こうした対立の抜本的解決は、明治という新しい時代を待たなければなりません。輪中意識と防水組織

年には、安八町一帯は笠松県・大垣県・名古屋県・犬山県に所属、同年十一月には岐阜県に、同十二年には安八郡に所属、同三〇年四月の地方制度改正に伴い、三村が合併し、名森林村、結村、牧村の誕生となり、それぞれの自治の道をたどっていきました。昭和二十八年、町村制合併促進法が施行され、同三〇年、三村が合併して安八村となり、昭和三十五年四月一日には町制が施行され、安八町が成立、現在の町域を確定しました。こうした近代化の波は、安八町の農業を飛躍的に発展させることとなりました。明治二〇年に着工された木曾三川下流改修により水害は減少、河川締切により耕地面積も増加し、緑豊かな穀倉地帯へと成長。大垣・岐阜・名古屋という都市に近接した立地条件を活かし、米作を中心として野菜の栽培、ビニールハウス等を活用し、現在では施設園芸や養鶏、酪農などが行われ、現在では地域に融合した農産物の生産振興と意欲的な農業経営に取り組んでいます。一方、伊勢湾臨海工業地帯、北陸圏、名古屋都市圏及び近畿圏の接点に位置するという地理的条件は、産業の発展をも促しました。町制施行後、行政による工場誘致が決定されると、大手家電メーカーの工場が建設され、カラーTVの製造を開始、純農業地帯というイメージはすっかり払拭されました。国鉄（現在のJR）新幹線や名神高速道路の町内貫通などの交通アクセスも産業化を促進した大きな要因です。現在では超LSI・フロッピーディスクなどのコンピュータ関連製品を生産する企業や乳製品生産などの企業誘致などにより、緑の中の田園工業都市へと大きな変貌を遂げました。また、快適で住みよく、美しい環境づくりのための整備も着々と進行中。現在では公共下水道整備事業が進められています。

参考文献 『安八町史』通史編 安八町発行 『ふるさと安八町』安八町教育委員会発行 『地名事典』角川書店発行



輪中地帯の 悪水排除と防水活動

江戸時代に入り輪中形成が進むと、農業の生産性向上という成果を生み出すと同時に、洪水対策や悪水排除という、矛盾をも抱え込むことになりました。掛廻堤の築造により天井川が出現し、洪水の度に危険が高まる一方、悪水排除に奔走することになったのです。こうした水防活動は、明治時代にも受け継がれ、現在では、多彩な治水事業が行われています。

江戸時代の悪水排除

安八町一帯の水害が深刻化するのは、江戸時代以降のこと。環状の輪中堤をもたず、河川が流動的であった時代は、洪水による被害も少なく、天井川も少ないため、排水も比較的容易に行われていました。堤防内外にある遊水地帯が洪水という外敵から、また内水（輪中内に湛まる雨水など）という内なる敵から、集落や田畑を守る役割を果たしていたからです。しかし、江戸時代に入り農業生産の向上を目指した新田開発が進むようになると、この遊水地帯を堤内に繰入れて新田として開拓、それにしたがって環状の輪中堤を築くようになりました。こうした輪中の形成は、農業生産に大きな役割を果たす反面、田畑や家屋に損害を与えるようになったのです。宝永の大取払いや宝暦治水などの河川改修も、洪水や内水被害の遠因となりました。大規模な築堤や河川の締切は木曾三川下流域に大きな効用をもたらしましたが、その半面、輪中内よりも河床が高いという天井川の現象を生み出し、洪水や湛水による弊害をも引き起こしてしまいました。

輪中の最大の問題は、洪水防御は無論、輪中内にたまる悪水の排除にありました。どの輪中においても排水路である悪水江を掘り、悪水込樋（排水管）を敷設すべく努力しましたが、問題はこの排水をどこへどのように放出するかにありました。即ち、上流部の輪中が悪水を下流部に放出すれば、悪影響を及ぼしがないが、従って、近隣輪中との調整が必要になってきます。また排水管は輪中堤内に伏込むことが多いので、この工事は堤防の保安上、笠松堤方役所や多良役所の許可・監督を必要としました。また、流砂の堆積による天井川の傾向は、通常の排水機能にも悪影響を及ぼし、従って悪水江をさらに川下まで掘下げていかなければなりません。これは当時江下げ普請と呼ばれましたが、そのためには下流輪中部一定額の江料を支払う必要もありました。

森部輪中は宝暦治水によって築造された大

樽川洗堰に被害を最も大きく受けることになりました。この洗堰は大樽川への水落ちを減少させましたが、その反対に長良川本流への水行を緩め、流砂を滞らせたため、悪水排出に悪影響を与えたのです。

明和三年（一七六六）、森部輪中は悪水江伏越を願い出、次いで享和二年（一八〇二）には※白普請による悪水落江下げを計画しました。この工事は中村川の川底に伏越樋を埋め榎俣村（現在の輪之内町）と大藪村現在の輪之内町）の堤外畑を借地して新排水路を敷設し、悪水を排出するというもの。工事代金約三九六両を要した工事は、翌年には完成しますが、その費用はすべて輪中内の村々の負担。しかしせっかくの伏越樋や悪水江も、その後機能を果たさなくなったため、森部輪中はまたしても、白普請という重い負担を背負うことになったのです。こうした悪水江の開削は、各輪中の大きな課題。利害の反する輪中間の調整は、しばしば対立抗争にまで発展、この問題は開明の明治維新をすぎてもな



輪中絵図 岐阜県立歴史資料館所蔵

お、大きな抗争を引き起こしています。

※白普請：江戸時代の河川改修の一つの方法で、その全費用を担当集落が負担した。

木曾三川下流改修と安八町

木曾三川下流改修とは、木曾・長良・揖斐三大川の中流より河口までの、最も水害の大きい流路の改修工事です。宝暦治水以後、

ずれも物別れに終り、関係町村長及び役場職員全員が辞職を決議し、実行することになりました。

これに対して岐阜県は職務管掌を任命し、各役場へ送り込みました。これが火に油を注ぐ結果になったのです。

昭和四年一月八日、犀川事件はついに勃発しました。千人を超える群衆と警戒にあたっていた警官隊の間で、乱闘騒ぎが起り流血事件にまで発展、翌日には軍隊が出勤するという、最悪の事態になりました。

事件は建設省及び県立局の必死の説得でようやく治まりました。この事件によって警察へ連行された者約三百名、起訴された者は四十七名でしたが、有罪の者も全員が執行猶予。事件の後、犀川切落とし計画は大幅に変更され、当局・住民双方の妥結がなされました。

安八町のほぼ中央、水取地区には犀川事件碑が聳えています。刻み込まれているのは義烈の二文字。これこそ、おのが集落を守り抜く輪中意識なのかもしれませ



検挙に来村した警官隊

参考文献

- 『木曾三川―その流域と河川技術』建設省中部地方建設局発行一九八八年
- 『安八町史』通史編
- 安八町発行
- 『犀川騒擾事件史』犀川騒擾事件史編集委員会
- 『安八町／町勢要覧』安八町発行

AREA REPORT



三川分流碑

に合流し、五六・犀川は祖父江で長良川に合流する地理的環境にありました。しかし、長良川の河床が高くなったために悪水の排出が困難となり、一帯に湛まった悪水は農作物にも大きな被害をもたらしました。また、長良川出水の場合は、排水口から逆流することもしばしばでした。こうした悪水被害を解決するために計画されたのが、犀川の切落しでした。

この切落とし計画は、当時の反対運動の激しさから、実際に公表されてはいません。しかし事件後の公判調書から安八町一帯に影



掘削された新犀川

響を及ぼすものを分析してみると、次の概要を推察することができます。その概要は、犀川・五六川・中川・長護寺川を一本の川にして安八郡と海津郡を南北に通し、本県郡の悪水を長良川に切落とすというもの。この計画が策定された大正十一年頃から、反対運動は始まりました。

安八郡はそもそも長良川と揖斐川にはさまれた南北に伸びる輪中地帯。集落を分断するように輪中地帯の真ん中に悪水路を開削されたのでは、洪水の心配は無論のこと、新川を作るために二百町歩（二百ha）に及ぶ耕地を失うことになるからです。もちろん、交通にも大きな支障をきたします。予算上、幾本もの橋を架設することは不可能だったからです。

昭和三年、反対運動の盛り上がりにも関わらず、犀川切落とし計画が強行されることとなり、安八郡七ヶ村は、内務大臣や岐阜県知事に反対の陳情を繰返しました。しかし

流砂によって河床はますます高くなったこと、輪中堤の築造によって川中が狭くなり土砂の流出が河口の閉鎖状態を招いて洪水の脅威が増してきたこと。こうした水害に対応すべく、明治政府は大規模な河川改修を計画したのです。

木曾三川下流域の改修は四期に分けて実施されました。安八町一帯に大きな成果をもたらした工事は明治二九年から着工された第二期工事です。長良川揖斐川改修をはじめとした大樽川、中村川、中須川の三支派川の締切工事は、治水のみならず農業生産の面でも大いに功を奏しています。特に中村川、中須川の締切は従来網の目状に乱流する自然条件に大きな変化をもたらし、廢川地の耕地化によって田畑は増加、岐阜県下でも有数の穀倉地帯に成長しました。

改修工事による輪中堤の撤去は、結・森部・北今ヶ淵などの小輪中を支えていた輪中意識の垣根も取払いました。乱立する小輪中が大輪中へ統合されるようになると、水防意識もより広域なものへと高められたのでした。しかし、水害という魔の手を一挙に解決できたわけではありません。

犀川切落とし計画

三川分流を実現した木曾三川下流改修に引続き、大正十年には上流域の治水を目的とした上流改修が実施されました。木曾三川上下流改修は、治水という意味で大きな成果をもたらしましたが、しかしこれで水害の危険が皆無となったわけではありません。堤防の築造や補強によって破堤を防ぐ方策は講じられましたが、悪水排除は依然大きな課題。排水路の整備は急務な課題でもありました。

昭和四年一月八日、安八町一帯を震撼させた犀川事件が勃発しました。ことの起りは、本県郡南部低地部の長年にわたる悪水排除のための計画にありました。

本県郡南部地方は、東から天王川、糸貫川、中川、五六川、犀川などが網の目のように流れ、中川は穂積村（現在の穂積町）で長良川

『木曾三川の治水史を語る』建設省中部地方建設局

木曾川上流工事事務所

『9. 12豪雨災害誌』

安八町発行伊藤安男監修

『中日新聞』連載「デレーケの生涯」

平成六年十月二十七日

平成七年一月十日掲載

九二災害を乗り越えて

昭和五一年九月十二日、台風十七号に伴う集中豪雨で長良川右岸堤防が安八町で決壊、三千五百世帯、一万五千人が被災するという大惨事に発展しました。

九月八日から降り続いた雨量は年間の約半分の一〇〇mmに達し、わが国戦後水害史上最大のもの。六日間に及ぶ未曾有の長雨はついに長良川堤防を決壊し、濁流は安八町と北隣の墨俣町全域に襲いかかり、安八町善光の区長・富田智太郎さんは、水防作業中に殉職するという、痛ましい悲劇を生み出しています。

決壊の翌年、安八町住民原告団を結成し国を相手取り岐阜地裁へ提訴。五七年の一審判決では原告勝訴、控訴審の名古屋高裁は、平成二年一月、住民側全面敗訴の判決。原告団は上告しましたが、最高裁は平成六年十二月二十七日、上告を棄却、原告団は平成七年二月解散しています。

この裁判と平行し建設省は、激甚災害対策特別緊急事業として堤防の改修や護岸の整備などを積極的に進めました。

現在その破壊箇所には、長良川破堤記録碑や治水観音像が建立されています。

安八郡一帯を襲った未曾有の九二災害。こうした災害を乗り越えるべく、安八町では、多彩な防災活動が行われています。



結神社

りました。ところがそれは決して祝福される間柄ではなく、そのため姫は艱難辛苦の荒波にさらされることに。美濃の赤坂(現在の大垣市)へ身売りされ、下女としての重労働をこなさねばなりません。耐え難いほどの辛く厳しい毎日。それでも姫は、来る日も来る日も結神社へと願をかけてました。「判官に会いたい」その一心で。そしてついに、「東へ旅しなさい。おまえが肌身離さず持つている観音様をこへ置いていけば、必ず判官に会わせてあげよう」という夢のお告げがあったのです。姫はお告げに従い東へ。慕い焦がれた小栗判官と再会できたということです。縁結びと安産の守り観音として多くの参拝客が訪れる「町屋観音堂」のご本尊は、十一面観世音菩薩。その頭上に輝く、一寸八分の黄金仏は照手姫の守り本尊と言われ、かつては結神社にあったものと伝えられています。

■放浪の画家・蓑虫仙人
結神社が位置する地区は、かつての結村。江戸末期より明治にかけて、ここから二人の

桜の花が咲き競う 歴史街道を行く

ひとひら、ふたひら、爛漫の春が、幾千もの花びらを川面に浮かべて、薄紅に風を染め上げる…。彼方に霞む養老の山々は、うららかな空に溶け、夢ごち。たおやかに流れる季節の中で、耳を澄ませば、聞こえてくるのは、歴史の子守歌。問わず語りの悠久の詠。

● ● ●
今からおよそ八〇〇年ほど前、鎌倉幕府の成立から間もなくして、京都と鎌倉を結ぶ道が整備されました。六三の駅が設けられた鎌倉街道は、かつての日本の大動脈。この道は、東西文化の交流はもとより、軍事上の戦略においても重要な意味を持つバイパスラインだったのです。

美濃の地は、そんな鎌倉街道のルートでもありました。不破郡の青墓宿から垂井、赤坂を経て、安八町町屋、入方(東結)、墨俣町二ツ木、長良川を渡って羽島市へ。のちに美濃路という名で呼ばれたこの道が、過ぎ去りし遠い日、活気あふれる宿場や引きをもちらぬ人馬の往来で賑わったことは想像に難くありません。

そこで歴史浪漫への期待をポケットに詰め込んで、ここ安八町でかつての鎌倉街道をたどってみました。現在この道は、趣を生かし調和の取れた整備が着々と進んでいます。沿道には、照手姫ゆかりの「町屋観音堂」、「結神社御手洗水鉢」、町民憩いめスペース「まちあい公園」などが配され、町屋から入方に至る一三〇〇mの松並木こそなくなったものの、春ともなれば美しい桜並木が人々の目を楽しませてくれます。有為転変は世の習い。幾星霜を経た今



町屋観音堂

■結神社と照手姫伝説

「高御産霊神・天御中主神・神御産霊神・猿田彦命」の四神を祀った結神社は、生産の神・縁結びの神として名高い神社。多くの人の想いを受けとめてきた神様です。建仁三年(一一〇三)には、『十六夜日記』の作者である阿仏尼も参拝し、こんな和歌を残しました。

守れただ契りむすぶの神ならば
とけぬ恨みにわれ迷はさで

昔も今も、人の心を惑わせる恋の悩み。照手姫もまた、結神社に恋愛成就の願いをかけた女性の一入です。

室町時代、とある豪族の一人娘照手姫には、小栗判官という契りを交わした男性がお

風を確立していきました。

淡い紅と淡い碧が、墨色に溶け合って紡ぎだす印象的な色彩…。その洒脱な画風は彼の生き様そのものを物語っているでしょう。みの虫は世渡り知らずごくつふし
人の情けをかさにきるのみ

白らの人生にこんな評価を下した彼は、明治三三年、黄泉の国に旅立ちました。権力や名誉を嫌い、自由人をまっとうした放浪の画家は、故郷結村に戻ることもなく、六五歳の生涯を閉じています。

■裸談義の花咲く安八温泉

坦々と広がる水田にボツンとたたずむ白いモダンな建物。それが安八温泉です。ここの人湯料は、わずか三百円。銭湯顔負けの安さです。というのも、ここは安八町が経営する保養センター。町内在住の老人は無料というサービスが魅力です。ということで、昼間から押し合いへし合いのにぎわい。温泉



安八温泉保養センター

ひ弱さをつくづく感じいったのでした。人間の脆弱さは虫けらにも劣るもの…。それに発憤した源吉は、折りたたみ自在のテントのような寝帳を考案しました。この寝帳は広げて組み立てれば、一間四方の寝室に、折りたためば一mばかりの笈として背負うことができるもの。この中に、鍋、釜、食器、絵描きの道具を入れ、いつも背負って歩き、白らを「蓑虫山人」と称するようになりました。この蓑虫とは、寝帳を考案するきつかけとなった蓑虫にちなみ、また彼の出生の地、美濃の国に由来するもの。その後、いつ頃からの工夫かはわかりませんが、この寝帳に車輪をつけ曳いて旅をするようになりました。彼は「長良川納涼の図」や「赤坂金生山傘松茶店之図」など、多くの風景画や街道絵図を残しながら、全国を旅しています。この間に画家としての名声を獲得していたのでしよう。師匠をもたない蓑虫は、だからこそ流派に縛られることもなく、洒脱にして軽妙な画

気ままにJOURNEY

■文化が、人馬が行き交った鎌倉街道
名神高速道路・岐阜羽島I.C.から車で約十分、羽島大橋を越えればそこは安八町です。蒲公英の髪飾りをつけた田園、絹のようにたなびく雲…。のびやかな風景に誘われて車を走らせると、ほどなくして揖斐川に行きあたります。川に向こうは大垣市。川に囲まれた輪中の郷・安八町。ここは、いつもの物語が、いくつもの心が、今も静かに眠る町です。

天才画家が生まれました。土岐源吾一、のちに自ら蓑虫山人と名乗ったこの人の生涯は、実に起伏にとんだものでした。天保七年(一八三六)、美濃源氏の末裔である名家・土岐家に生まれ、幼い頃に一族が没落。わずか十四歳で諸国流浪の旅に出立し、幕末にはその青春時代を勤皇の志士としての活動に費やします。そんな彼が二十一歳の頃にこんなエピソードが残されています。

あるときは路傍の軒下で雨露をしのぎ、あるときは神社の冷い拝殿で惜り寝をし、またあるときは情けの宿を乞うては追われの放浪生活をしていた頃、彼は一匹の蓑虫を見かけました。

木の葉屑を綴って身にまとい、雨風の中を這い回る蓑虫の強い生命力に驚愕し、同時に絶望感さえ覚えたのでした。

なぜなら、蓑虫以上に屈強な身体をもちながら、雨も風もしのぐことのできない自分。自然の営みの中で、寒さに震える人間の

●安八町さくら祭●



4月1日、2日:安八町役場前広場

春の訪れとともに一斉に開花する桜並木。その美しさを愛でながら、歌謡ショーやカラオケ大会、バザーなどがにぎやかに催されます。また同日、役場・公民館では、合併40周年記念イベントも開かれ、今年のさくら祭は従来にも増して盛大なものとなりそうです。

■ゲートボール大会

4月中旬、10月中旬
：南ヶ測グラウンド

■マス釣り大会

5月上旬：西結地内中須用水

■安八町スポーツレクリエーション祭

8月中旬：総合運動公園野球場

■町民運動会

10月15日：各小学校グラウンド

■ヤングフェスティバル

10月下旬：安八町中央公民館

■安八町商工業業祭

11月上旬：安八町役場前広場

■社会福祉大会

11月下旬：老人福祉センター

■勤労青少年ホーム祭

11月下旬：勤労青少年ホーム

■新春走ろう会

1月上旬：安八町中央公民館前

■文化講演会

2月上旬：安八町中央公民館

■安八町文化祭

2月下旬：安八町中央公民館

※通年行事

おんさい朝市

毎月第1日曜日

：安八町役場前広場

土曜日

毎週土曜日：安八温泉前広場



●公共交通機関利用●
JR/岐阜駅から東海道本線で12分
大垣駅下車後、バス
●マイカー利用●
約1時間
名古屋I.C.→名神高速道路を60km
→岐阜羽島I.C.→5km→安八町

縁結びの結神社
照手姫ゆかりの町屋観音堂
まちあい公園
桜並木
揖斐川
町屋公民館

特集

明治改修

第三編

千本松の景観をそのままに、
ついに実現した完全分流工事

明治二〇年四月、木曾三川流域民の悲願であった完全分流工事はついに着手されました。木曾・長良・揖斐をつなぐ支派川をくまなく断切つて、新木曾川、新長良川など、新しい河道を切り開く…。背割堤で三川を分割し、流況の安定を図るため、ケレップ水制や導水堤を築造。人智を尽くした改修工事は、二五年の歳月を要してついに竣工されることとなりました。



千本松原

■改修前夜

明治二〇年四月、木曾三川流域民が待ちに待った三川分流工事が着手されました。デレーケの手になる木曾三川下流計画図は着工に先立ち、同年二月に名古屋で明治天皇の天覧に供され、同年四月には内務大臣山縣有朋率いる一行が現地を視察するなど、大掛かりな行事が挙行されました。これも国を挙げての一大事業であったがらに他なりません。宝暦以降流域民の念願であった三川分流は、ついに着工の日を迎えることになりました。

木曾三川下流改修は、明治十八年に提出されたヨハネス・デレーケによる計画書に基づいていますが、同年六月に木曾川下流部を直撃した台風の被害などを参考に、幾度も手直しされています。

■工事の概要

当時の改修工事の内容は以下のものでした。

- 1 木曾川は佐屋川を締切り、小敷川で長良川を締切り、新水路を南の立田輪中の西部に開削し、旧左堤をそのまま右堤として下流低地に導き、長島輪中の東を流下させる。
- 2 長良川は新水路を高須輪中の東部に開き、木曾川と背を分けて旧河道を南流させ、長島輪中の西北部を開通して桑名に流下させる。
- 3 長良川と揖斐川は、中村川、中須川、大樽川の三水路を締切り、揖斐川は川巾を広げ、油島締切堤を増築して本堤となし、三重県大山田村地先に新河道を開き、桑名や北方

の両川水位の等しい地点で合流させ、木曾川の河口と同様に浚渫し、通船にも便を図る。これらの工事は洪水防御及び排水改良のため、三川を分流し、高水時・低水時ともに各水系の流交を断ち、各水系の独立を目的としており、先の宝暦治水を徹底的に完成させるとともに、輪中を廃して堤防を短くし、新川を開削して川巾を広げ、流路の屈曲を矯正し、導水堤や護岸水制を設ける一大工事でした。尚、この改修は洪水を河道内に封じ込め、速やかに海へ流入させるという高水工法であり、基本的には宝暦治水を発展させたカタチで進められています。

■施工の経過

木曾三川下流改修は明治二〇年から同四五年にかけて実施。第四期に区分して施工されています。

第一期工事

明治二〇～二八年度にかけての九年間で、その施工区は木曾川に限った。木曾川河口導水堤の築造、河口の浚渫よりはじめ、漸次上流の築堤・浚渫に及んだ。築堤工事は明治二〇年度、まず横溝蔵の木曾川河口導水堤との接続点より起工し、漸次上流へ及んだ。明治二六年度末には、木曾・長良背割堤となる松山・中嶋の新堤に着手し、明治二七年には竣工した。続いて成戸・大和田及び長瀬・日原なる新長良川の右岸堤及びこれに対する木曾・長良背割堤を起工したが、第一期内では竣工せず、第二期に入つてようやく竣工した。

第二期工事

明治一九年度から三二年度にかけての四年間で、改修の骨子ともいえる三川分流を目指した。浚渫工事は前期からの繰越しの日原・成戸の大土量の大部分を処理。築堤工事は立田輪中及び佐屋川締切堤を竣工した。第一期に着工した木曾・長良背割堤は明治三二年に竣工、締切築堤工事は第二期における主要工事。木曾・長良背割堤のほか、長良川筋の大樽川、中須川、中村川の締切り、松ノ木・船頭平、松ノ木・油島の締切りを施工し、三川分流工事が竣工した。船頭平開門工事も着手し、基礎工を終了した。

第三期工事

明治三三年度から三八年度にいたる六年間で、三川分流とは直接関係のない揖斐川筋の松ノ木以上の改修を行った。前期より引き続いた開門工事は明治三四年度に竣工した。

第四期工事

明治三九年度から四四年度にいたる六年間で、前期の残工事のほか、揖斐川河口導水堤の築造や水制工事が施行された。尚、全体の竣工は、整理の関係上明治四五年度となった。工事は以上のように進捗しましたが、三川分流工事及び大樽川・中須川締切工事が竣工した明治三三年四月二日には、愛知・三重・岐阜三県合同の三川分流成功式が成戸の堤防上で挙行され、時の総理大臣・山縣有朋、内務大臣・西郷従道なども出席しています。

■背割堤の締切工事

背割堤とは、二つの川を分流するために両方の川の境界に築造した堤防を意味しています。



木曾・長良背割堤は木曾三川下流改修工事の主目的である分流工事に際して築造されたもので、岐阜県羽島市と海津町の境界にはじまり、岐阜県境に沿つて南下し、途中から愛知県側に入り立田村福原まで続く延長十二kmに及ぶ長大な堤防です。

この分流工事は先述したように、第二期工事で行われました。その締切築堤工事は、まず木曾川筋成戸と日原間、同じく日原と塩田間において木曾・長良川の連絡を断ち切り、次いで松ノ木と船頭平間において新木曾川を新長良川より分離させ、油島と松ノ木間で長良川と揖斐川の連絡を断ち切りました。こうして宝暦治水以来の悲願である三川分流は実現しましたが、薩摩義士による喰違堰の旧土堤は新堤の小段として千本松の旧観を残し、また洗堰は張石を除き旧土堤を接続して小段形に盛土をし、千本松に続いて松を植樹しています。これが現在の治水神社・千本松原辺りの景観となりました。

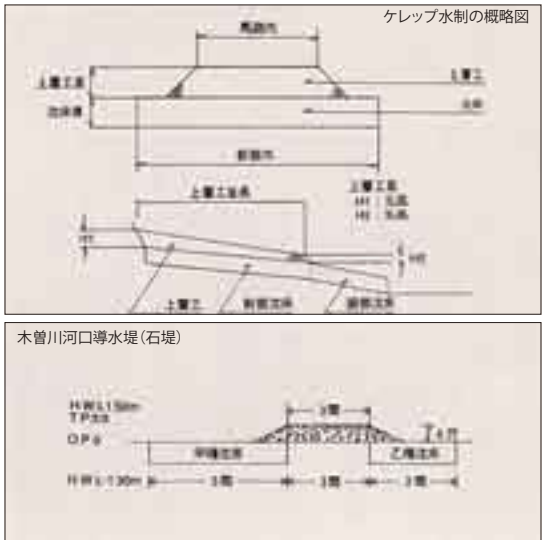
この締切工事は秋の出水後に着手されました。台風が来襲する九月から十月にかけては水害が増して、工事は困難を極めるからです。工事はあらかじめ新川に通水する低水路を開き、これに通水した後、締切線に箕猪・美濃国特有の水制や土砂を投入して施工されました。これはこの地方古来より使われている方法

であり、粗梁^{きた}沈床は一切使用されませんでした。

■ケレップ水制の導入

改修の大きな特徴はケレップ水制の建設です。この工法はオランダ人技師のエッセンやデレーケらがわが国に導入したもので、従来の日本が築造していた水制^{みづぎ}（猿尾）の機能を進化させたもの。河岸から河心に突き出した突堤であり、その目的は以下の通りです。

- 1、河岸付近の流勢を弱めて河床の洗掘を防ぎ、土砂の沈殿を促して堤防護岸の安全を図る。
 - 2、水流の方向を変えさせて、水衝部の固定を図る。
 - 3、低水路の幅や水深を維持させる。
 - 4、流れを集中させて、取水等を便利にする。
- 木曾三川下流改修における施工箇所は三九三箇所、水制延長約六万六千mに及び、建設費用は直接工事費の二〇、八％を占めています。これは浚渫工事（三二、二％）築堤（二五、四％）に次ぐものであり、重要な工事であったことがうかがわれます。



■導水堤（導流堤）の築造

分流工事に伴つて河口部の水深を維持するために、木曾川と揖斐川河口二箇所に導水堤が築造されました。木曾川導水堤は全長四六八〇m、うち三分の一は土堤、残りは石堤となつています。土堤は新川掘削の際の浚渫土砂や撤廃する旧堤の土砂で築造、石堤は材料である石の入手が困難であったため、一時はコンクリート使用が検討されましたが、結局は石材で構築されることになりました。

揖斐川導水堤は全長約五四八〇mで、約二分の一の土堤と石堤で構成さ



木曾川導水堤

明治改修のあらまし

明治政府は西欧の近代技術を導入し、抜本的な改修。すなわち完全な三川分流計画を策定し、蘭人工師ヨハネス・デレーケの監修のもと、明治二〇年に着手しています。その目的は①洪水防御②堤内の排水改良③舟運路の改善であり、そのうち①と②が重点課題。高水工法を主体に第一期から第四期にかけて工事は行われ、明治45年には完成、三川分流を実現しています。

■参考文献

- 『木曾三川とその流域と河川技術』建設省中部地方建設局発行一九八八年
- 『デレーケの生涯―木曾三川を分流した男―』中日新聞
- 『デレーケとその生涯』建設省中部地方建設局発行昭和六二年
- 『木曾三川の治水史を語る』建設省木曾川上流工事事務所発行昭和四四年
- 『昭和五九年度／木曾・長良背割堤環境調査業務報告書』建設省木曾川下流工事事務所／昭和六〇年
- 『木曾・長良背割堤ハンドブック』建設省
- 『木曾川下流工事事務所監修発行『海津町史通史編下巻』海津町発行
- 『安八町史通史編』安八町発行
- 『生まれ変わった船頭平開門』建設省木曾川下流事務所平成六年

明治改修における治水技術

宝暦治水以来の念願であった木曾三川下流改修は、従来の施工方法を踏襲しながらも近代工法を導入。その治水技術を河村三郎氏（河川工学）に語っていただきました。



河村三郎
(こうむら・さぶろう)

一九三一年生まれ、岐阜県出身。一九六六年コロラド州立大学大学院終了。専攻は河川工学。岐阜大学教授を経て一九八五年から二期四年岐阜大学工学部長。一九九四年三月定年退官、岐阜大学名誉教授。現在中部電力技術顧問、及び河川環境研究所所長。著書、土砂水理学等。

近代的な治水工事として特筆される木曾三川の明治改修については、その計画のベースとなった明治以前の治水工事を述べる必要がある。木曾三川の治水史を語る場合必ず触れなければならないことは、治水史上で名高い宝暦治水工事である。これは通常『宝暦治水』あるいは『薩摩工事』と呼ばれ、工事受託より終了までの御手伝普請の悲惨さ、過酷さ、また外様藩である薩摩藩が幕府から受けた財政的・感情的な圧迫は、悲劇的な哀史として治水史上でも名高いものである。薩摩藩が莫大な犠牲を顧みず木曾三川の治水工事に尽くしただけに、より悲劇的である。宝暦治水は、三川分流を中心課題とした背割堤・締切堤・洗堰などの大工事であり、具体的には、①油島締切堤、②大樽川洗堰、③逆川洗堰締切の三つが最も難工事であった。現在のように施工機械が発達していなかった人力主体の施工方法であったので、その困難さは現代の工事方法と比較して想像を絶するも

がある。宝暦治水の最重要工事は、油島の締切工事であり、木曾川と揖斐川（旧名伊尾川）との合流点で南北から堤防を延長して両川を分離しようというものであった。この締切工事は、完全な締切ではなく中間の約六一二メートルを開口させて完了した。当時の水工技術上の問題や、様々な輪中間の利害関係から、その後油島の場合は喰違堰に、大樽川は洗堰といった妥協的な工法となった。このため土砂流送を含む河相論的な観点から見ると無理な面もあり、河床変動のため水害が減少する地域と増大する地域が生じ、輪中間の対立抗争などが生じた。なお大樽川の洗堰は、同川の入口に洗堰を設けて長良川・揖斐川の洪水調節を行い、揖斐川の洪水氾濫を軽減するために実施された。また、逆川は天正一四年（一五八四）の木曾川大洪水の時に生じた木曾川の派川で西北に流れ、竹ヶ鼻で足近川と合流し、さらに西北流して長良川に流入していた。この逆川を洗堰で締め切つて木曾川と長良川の洪水時の相互干渉を除去した。

三川分流への取組と改修調査

宝暦治水の後木曾三川流域ではしばしば水害を蒙るような悲惨な状況で推移し、明治維新を迎えることになった。後に『明治改修』として結実して行く大きな動機となった治水への要請は、明治維新直後から動き出した。明治新政府が明治元年（一八六八）に『治河使』を設置したのに触発されて、廃藩置県、明治四年（一八七一）前の笠松県では明治元年十一月に『水利論』を出して、新政府に対して治水の要請を行っている。さらに明治三年（一八七〇）に治

- ② 河道の拡幅および整理（新川の開削、屈曲部の矯正、護岸、水制、佐屋川などの廢川）
- ③ 河口部の処理（導水路、護岸、水制）
- ④ 輪中の廃止（内水排除を含む）
- ⑤ 流出土砂の抑制（砂防堰堤、山林保護、植林による水源地涵養）

から成り、洪水対処のための高水工事とともに舟運などのための低水工事を主目的としたものであった。三川分流工事の大きな特徴は、明治改修計画図から知られるように①木曾川については、佐屋川の完全締切りによる廃川および洪水疎通能力の確保と流送土砂の堆積防止のための観点から、河川の屈曲部を無くし、直線化するため新川を開削する。②長良川については、成戸より下流長島までの長良川の新河道は旧木曾川の河道を利用する。成戸より上流部は、一部旧木曾川の河道を利用するが、大部分は新川の開削を行い直線化する。なお、揖斐川に連結されていた大樽川の洗堰を完全に締め切る。③揖斐川については、河道の拡幅引堤により洪水疎通能力を高める。

上記の河道工事に当たつては、築堤、護岸ばかりでなく、低水路維持のための水制（粗朶沈床やケレップ水制）が各地に設けられた。木曾・長良の背割堤の木曾川右岸に設置されたケレップ水制は現存しており、オランダにおける緩流河川工法、とりわけ舟運のための低水路工事の特徴を見ることができ、ケレップ水制の水制長と水制間隔は長良川の河道に良く適合している。明治改修では、ケレップ水制が木曾三川で三七ノ箇所（総延長六・三六二キロメートル）が設置された。木曾三川下流部の河川景観は、流送土砂量の多寡を除けば、オランダのライン川下流部のそれと非常に似ており、両者の景観と河川処理の類似性に驚かされる。当時の河川

水・築港のためオランダ技師を招聘することが明治政府により決定されたことに對して、名古屋大参事丹羽賢は木曾川を治めるための熟練の外国人を雇用したい旨、工部省へ申し出ている。そして明治四年（一八七二）には、岐阜・愛知両県関係の輪中の堤防取締役が土木司に『木曾三川分流工事の施工』を願ひ出ており、岐阜県治水史によれば、これを三川分流についての民意の始めであるとしている。明治六年（一八七二）には、岐阜県安八郡の浄雲寺住職高橋示証が三川の幅員を木曾川三〇〇間（五四五メートル）長良川二五〇間（四五五メートル）揖斐川二五〇間（四五五メートル）に拡張するとともに河口までの分流の必要性を具体的に提言した。彼は、さらに明治八年には三月と六月の二度にわたつて再提言をしており、具体的に施工手順や工事費の見積もり、便益の見積もも行っている。明治改修計画では、オランダ人工師ヨハネス・デ・レーケの名前のみが大きくクロウズアップされているが、実際には、この高橋計画書やそれ以前の三川分流の請願書がベースとなっており、地元の要望もさることながら最終的な治水の決め手が三川分流であることをデ・レーケ以前に提言していることは、注目に値しよう。

このように明治改修に先立って、またデ・レーケが調査と計画立案に本格的に取り組む以前に、官民双方より木曾三川改修（分流改修）に対する熱的な要望が出されていたことは特筆すべきことであつて、この地域の治水が深刻かつ複雑な問題であつたことを如実に示している。

オランダ技術者のうちで木曾三川と切つても切れない宿命的な関係ができたのは、四等工師ヨハネス・デ・レーケであつた。彼は明治六年（一八七三）九月に三才で来日し、同三年（一九〇三）の六才の時に帰国した。なお、彼の父ピーター・デ・レーケはオランダの堤防築堤工であつて、このような家庭環境と干拓堤防に囲まれた出生地の情景は、後のデ・レーケの治水技術に大きな影響を与えたであろう。来日当初は、淀川改修と大阪築港に参画していたが、明治十年（一八七七）十一月十九日付

工法の他国への技術移転はこのような状況の下で進んだのである。木曾川下流改修計画は、日本で初めてシエジー公式の変形式（平均流速公式）に基づき計画高水流量と河川幅の決定を行ったものであり、日本における近代河川計画の嚆矢であつた。デ・レーケは、その作成者としての功績が後に評価された。なお、政府は明治二九年に河川法、同三十年に砂防法、三十三年には土地取用法を制定し、河川事業の主眼は堤防工事を主体とした洪水防御のための高水工事へ移行させている。明治改修の工事中には、明治二四年（一八九〇）十月二八日に発生した濃尾大震災、明治二七年（一八九四）一九五の日清戦争、明治二九年の大洪水等の出来事が次々に発生し改修事業が遅延ぎみであつたが、幾多の苦難を乗り越え明治三年（一九〇〇）四月二二日に三川分流成功式が挙行された。特に濃尾大震災は、M八・二死者七八〇人、負傷者二〇〇人、全壊家屋二六四四軒という大災害であり、各地で地盤の液状化を生じて、河川堤防、海岸堤防、道路、橋梁、溜池、桶管、用水等の土木構造物の被害が広域的に発生し、それらの復旧に多額の経費と日数を費やしたことが知られている。この大地震による被害額は、当時の国家予算のほぼ一年分に相当し、震災損失額がいかに大きかったかが分かる。このような状況であつたので、木曾三川分流改修工事は、数年間停滞した。なお、大正十二年（一九二三）に

年	研究者	事項
1769	Antoine Chézy	シェジー公式を発表（セズ川のデータで検証）
1828	J.B.Bélangier	定常流の数値解析を発表（パリ、14ページの論文）
1836	G.Coriolis	背水曲線の式を発表
1840	J.F.Auboussin de Voisins	実用水理学（機脚部隆上げのドビソン式で有名）、パリで発表
1844	J.Scott Russell	波に関する論文（80ページ）を発表
1848	A.J.E.J.Dupit	背水曲線の式を発表（パリ）
1849	J.B.Bélangier	限界水深の概念を発表
1857	M.Rühlmann	背水曲線の式を発表（ライプツヒ）
1860	J.A.Ch.Bresse	背水曲線の式を発表（ブレスの式として有名）
1869	E.Gangillet and W.R.Kutter	ガンギレー・クッターの式を発表（ウィーン）
1871	H.L.Partiot	河床波の伝播速度の式を発表（ロワール川のデータ）
1871	J.V.Boussinesq	開水路の定常流について発表
1875	F.Grashof	背水曲線の式を発表（ライプツヒ）
1876	J.Thompson	蛇行河川の成因の論文を発表
1876	L.Rayleigh	波についての論文を発表
1877	J.V.Boussinesq	流水の理論（運動量理論による限界水深の概念）を発表
1879	Pdu Boys	掃流砂量式（現在でも使用される最も古い式）
1883	G.H.Darwin	砂連形成の論文を発表
1889	R.Manning	マンニングの等流公式を発表
1897	H.E.Bazin	バザンの式を発表
1898	G.Tolkmitt	背水曲線の式を発表（ベルリン）
1900	U.Masoni	背水曲線の式を発表（ナポリ）

BOOK LAND

自然ゆたかな川づくりを提唱した建設省在籍の河川技術者関正和氏が次代を担う若者に、情熱をこめて描いた日本の川の歴史とその現状、そして未来像…『大地の川』は「山梨水明の地日本」を願う著者の真摯な言葉でみなぎっている。執筆の理由は直腸ガンに罹患した著者がいわば遺稿のつもりでパソコンを叩いたというもの。肺にガンが転移した後、記された『天空の川』は、夫婦とは、人間の強さとは何かが胸に迫る出色の闘病記。関正和氏は残念ながら今年一月に死去。その優しく凄絶な一生が綴られた必読の書である。



大地の川 著書 関正和
天空の川 発行 草思社

- 文献
- ①河村三郎…宝暦から明治への治水史、フロント、No.九、一九九一
- ②土木学会中部支部…中部の土木史、土木学会中部支部五十周年一記念誌、一九八八
- ③建設省木曾川下流工事事務所…『デ・レーケとその業績、一九八七
- ④建設省中部建設局…木曾三川とその流域と河川技術、一九八八

砂量の把握を目指したものと推察される。明治六年（一八七二）には、木曾三川に量水標が設置され、同年五月十一日には、岐阜県中島郡馬飼村より測量が開始された。これが木曾川下流改修についての測量の嚆矢である。木曾三川下流域の測量の完成は明治十六年十二月である。デ・レーケが改修計画を進めていた当時のヨーロッパにおける水理学分野の状況を示すと別表のようである。既に一七六九年にはシエジー公式が発表されており流水の等流計算が可能であり、またド・ボフの掃流砂量公式が発表されていた。当時の学問的水準からは、河床変動計算は出来なかつたけれども、土砂の輸送に関わる掃流力が水深と水面勾配の関数であることは知られていたので、シエジー公式の変形式と掃流力を内包した河川幅の計算式（河川幅を流量、径深、水面勾配の関数で表現した式）から河川幅が検討されていた。

水理学の側面から見た明治改修

以上のような調査結果から、明治十七年十月に木曾川改修計画の立案に着手し、再三の計画変更を経て、明治十九年（一八八六）に明治改修の計画が完成し、翌年から工事に着手した。この『明治改修計画』の骨子は、①木曾・長良・揖斐三川の完全分流（喰違堰と洗堰の廃止）

がある。宝暦治水の最重要工事は、油島の締切工事であり、木曾川と揖斐川（旧名伊尾川）との合流点で南北から堤防を延長して両川を分離しようというものであった。この締切工事は、完全な締切ではなく中間の約六一二メートルを開口させて完了した。当時の水工技術上の問題や、様々な輪中間の利害関係から、その後油島の場合は喰違堰に、大樽川は洗堰といった妥協的な工法となった。このため土砂流送を含む河相論的な観点から見ると無理な面もあり、河床変動のため水害が減少する地域と増大する地域が生じ、輪中間の対立抗争などが生じた。なお大樽川の洗堰は、同川の入口に洗堰を設けて長良川・揖斐川の洪水調節を行い、揖斐川の洪水氾濫を軽減するために実施された。また、逆川は天正一四年（一五八四）の木曾川大洪水の時に生じた木曾川の派川で西北に流れ、竹ヶ鼻で足近川と合流し、さらに西北流して長良川に流入していた。この逆川を洗堰で締め切つて木曾川と長良川の洪水時の相互干渉を除去した。

宝暦治水の後木曾三川流域ではしばしば水害を蒙るような悲惨な状況で推移し、明治維新を迎えることになった。後に『明治改修』として結実して行く大きな動機となった治水への要請は、明治維新直後から動き出した。明治新政府が明治元年（一八六八）に『治河使』を設置したのに触発されて、廃藩置県、明治四年（一八七一）前の笠松県では明治元年十一月に『水利論』を出して、新政府に対して治水の要請を行っている。さらに明治三年（一八七〇）に治

民話の小箱

蛇池と一本松

安八町

むかし、むかし。

人々が、水との闘いにあけられていたときのこと。
洪水に幾度となく堤防は切れ、
安八町の北の集落、入方あたりも度々水浸しになったそうです。

そんなある日、一人の村人が川べりを歩いていたら、堤防のそばの大きな松の木の下に腰を降ろし、
一服していた村人がふと空を見上げると、
不思議なことに、松の枝からツツジの葉っぱが出ていたそうす。

「なんと、おかしいことか。松にツツジが出ておるぞ。」
気になった村人は、会う人、会う人に、この松のことを知らせてまわりました。

「へんじやのう。こんな松は見たこともないぞ。」
「何かの前ぶれじやろうか。」
不思議だ、不思議だと首をひねる村人たちをしりぬきに、
ツツジの葉っぱはついに数えきれないほどになりました。

やがて夏が過ぎ、秋の長雨がやってきたころ。
降り続く雨に川の水位は増し、
村人たちは再び、洪水の恐怖にさらされることになりました。

「堤が切れるぞーう、ツツジの松の堤防が切れるぞーう。」
うすまぐ水の流れは入方の堤防を押し流し、
とうとうあの不思議な松を飲み込んでしまいました。

その洪水の際にできた池を眺めながら、村人たちは
「さっさとあの松は、自分が洪水で流されることを知っておったんじやの。」
最後の力を振り絞ったんじやろうなあ。」
と口々に語りあつたそうです。

その後村人たちは、松が眠るその池を『蛇池』と呼び、
自然の不思議を教えてくれた一本松を、
丁寧におまつりしたといひます。



木曽川文庫利用案内



- 《開館時間》 午前9時～午後4時30分
- 《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》 無料
- 《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

『長島町輪中の郷』では「三川分流展」が4月25日から開催されています。

当時の設計図や川の変遷など、三川分流の足跡をたどることができる貴重な展示会です。ご家族でお友だち同志で、是非お出かけください。

【お問合せ先】
長島町輪中の郷
〒511-11三重県桑名郡長島町大字西川1093番地
☎0594-42-0001

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曽川文庫まで。

Vol.14 編集にあたっては、安八町役場、河村三郎先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。

今回は木曽川町を特集します。ご期待ください。

表紙写真
左上：揖斐川
左下：犀川事件の碑
右：中須川の桜並木

『KISSO』Vol.14 平成7年4月発行

発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81
制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715
TEL(052)565-1976